長編小説

虚構大学

清水一行

長編小説

虚構大学

清水一行

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編小説　**虚構大学**　¥980

昭和54年4月25日　初版1刷発行

著者　清水一行（しみず いっこう）
東京都中野区鷺宮6-20-25

発行者　小保方宇三郎

印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347
株式会社 光文社
電話 東京（942）2241（代）

でお取替えいたします。　（複本製本）

Ikkō Simizu 1979

Printed in Japan

虚構大学

清水一行

装幀 伊藤 明

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

一章

はじめのうち、それは計画……と呼べるような代物では、すくなくともなかった。

さまざまな局面において、現状にたいする当事者たちの不満や憤りも、客観的に判断すると、当事者が感じる深刻さや意気込みほどのこともなく、実はごく月並みな、どこにでもあるといった種類のものであることが多い。

改革という、現状を打破する大きな社会的事業が、個人の限られた能力で、簡単に達成できるはずがなかった。

戦前から、神官の養成ではかなりな実績を持っている伊勢大学で、講師兼教務課長をつとめる深間良樹と、やはり講師で学生課長の大隈武雄の二人にも、教育界の現状を一変させるような理想的な大学の新設が、口で言うほど安直なものとは思っていなかったし、本気で実現できると、考えていたわけでもなかった。

ただ二人にとって、そのことは、長い間の酌み交わす酒の話題……であったことは、確かだった。

とくに古代史の研究家で、東大寺に関する研究で学位をとっている教務課長深間良樹は、直情的なロマンチストであった。夢を追いつづける執拗な粘着力を、同僚の大隈が持て余し、千田孝志を深間に引き合わせることになったものである。

「千田君というのは？……」

「まだ四十歳前の若さだが、いわゆる学校づくりの名手といっていい人物です」

「名手」

「そう。鮮やかなものです」

言ってから大隈は、すこし売り込み過ぎかなと思ったが、この場合こうでも言わないことには、千田孝志を山陰路の倉吉市から、わざわざ伊勢まで呼び寄せる理由にはならなかった。

I

宇治山田駅に近い宿の、二階十畳ほどの部屋に案内されると、千田は伊勢湾に面した東側の窓を、思いきりよく開け放った。

「この季節の伊勢が、一年中で一番です」

千田のボストンバッグを床の間に置き、大隈が背後から声を掛けた。

「いや、お訪ねしてよかった」

やがて午後五時になるはずだったが、昏れる気配には遠く、四月の陽光に映える穏やかな海面から、磯の香りを孕んだ風が、部屋の中へ容赦なく躍りこんできた。

五十鈴川と勢田川が合流する、伊勢湾の河口へ向かって、低い家並みが這うようにつづいてい

る。
因伯の枯れた風景とは違った趣きである。
千田は眼を細め、若い娘の媚態を思わせる甘い微風に、思いきり頬をなぶらせた。朝の八時に倉吉を出て、京都での乗り継ぎに手間どってしまったため、九時間近い旅になってしまったが、明るく輝いた海の眺望に、一瞬で疲労感を払われた思いだった。
宿の女中がお茶を運んできた。
「いまさらお伊勢さん参りでもないだろうが、しかしかんべんしてください」
テーブルに向かい合って、大隈が湯飲み茶碗を掴みながら、誘い出した詫び言葉を言った。
「そんなことはありません」
「ほんとうに？」
「もちろんです」
「それで安心しました」
「どうしてですか」
「気軽な旅……というわけには、やはりいかないんです」
なにか言い訳でもするような口調である。
〝今年の三月、四月は倉吉へ帰れそうもないので、一度紀勢路へぜひ……〟という、大隈からの誘いの手紙は二月末に受け取っていた。しかし千田も、倉吉市内の私立東伯学園という高校の理事長という仕事もあって、スケジュールの調整に手間取っているうちに、再度の大隈からの手紙で、学期休みにはぜひきてもらいたいと、念を押してきたのだった。
「おかげさまで、東伯学園のほうも、どうやら軌道にのりました。あまり気を使っていただかな

くてもいいんです」
「千田さんのことだから、わたしは安心していました」
「そう言っていただけますと……」
「それよりも奥さんは元気？」
大隈は、しばらくぶりの再会を、手放しで喜んでいるという感じではなかったが、奥さんは元気かと、初めて笑いを泛かべた眼で、千田の浅黒くよく緊った顔を覗いた。
千田が郷里の福岡を出て、人口五万人足らずの倉吉市で、東伯学園の新設に動きはじめたのは六年前であった。福岡を出た直接の理由は、妻との離婚という愛情の葛藤であった。公認会計士として築いてきた仕事はもちろん、家もそしてなにもかも一思いに捨て、文字どおりの裸一貫の出発といっていい。
伯耆の倉吉という小さな町を選んだのは、そこが新しい妻……である友子の、生まれ故郷だったという、それだけの理由に過ぎなかった。
もちろん情緒ある田園都市として、北原白秋の歌詩で知られた九州の柳川を偲ばせる、打吹山下の旧士族屋敷町にみられる静かなたたずまいの倉吉という町に、魅かれたことも確かだった。だがこのときの千田の心情は、友子と二人の、ともかく落ち着いた生活が欲しかったこと、そのためには、古くて美しいこの街に、できることなら新しい郷里意識を築きたいという思いがあった。
福岡時代に、千田は一度各種学校の新設に関与していた。
小さな町の倉吉で、高校の新設を思いついたのは、公認会計士以外のことで、自分にできる仕事がそれだったということと、市の幹部や、大隈武雄たちの熱心な協力が得られたためでもあった。

大隈は、設立直後の東伯学園の理事の一人に名前を連ねていた。もちろん友子との経緯も十分知り尽くしている。

一汗流してくれと言って、大隈は伊勢大学の職員宿舎へ帰っていったが、一時間ほどして、こんどは深間良樹と連れ立って、千田の部屋へ戻ってきた。ちょうど夕食の時間でもあったから、酒を命じて飲みはじめた。

深間とは初対面だったが、眼配りの鋭さが千田の印象に残った。

「実は千田さんに、謝らなければならないことがあるんです」

盃を交わし、三人で一口つけたところで、大隈が改まった口調で切り出した。だが、千田にとっては初対面の深間が、大隈を押し退けるように膝をのり出した。

「千田さん。あなたも大学と高校の違いこそあれ、教育事業にたずさわっている点では変わりがない。いまの教育について、どういう感想をお持ちか、聞かせてもらいたいのです」

唐突な口調である。

大隈も深間も、共に四十歳台の後半で、千田は三十九歳であった。

「いまの教育……ですか」

「そう、わたしはいまの文教界を、混乱の極みだと思っている」

「混乱の極み……」

「違いますか」

「混乱があることは事実でしょうね」

「そんな悠長な情況ではないはずだし、千田さんも十分承知していると思うのだが……」

千田はゆっくりと盃を置いた。千田には、旧知の大隈が自分になにを謝ろうとしたのか、まず

それがわかっていなかった。それだけに深間の押しつけがましい言い方が、胸につかえた。
「現状は混乱の極みで、情況は切迫しているとして、それでなにが問題なのですか」
顔を伏せたまま、千田は感情を抑えて聞いた。それでやっと大隈が、うなずくように千田を見上げた。
「そのことで、千田さんに相談にのってもらいたいと、それで二度も手紙を差し上げたんです。謝りたいと言ったのは、紀勢観光にお呼びしたのではないことについてなんです。かんべんしてくれませんか」
「そのこと?……」
「偏向教育を是正する、本来の大学を設立したいということです」
再び深間が、頑丈そうな顎を突き出して言った。
「大学の新設……ですか」
「みずからの国の歴史を軽侮する教育なんて、これはおかしい。だから道義が破壊され、祖国愛がどこかへけし飛ばされてしまうんです。こんなことじゃ、一つの例外もなしに、日本の大学は赤い旗に支配されてしまう」
「……」
「民族意識を貫き、赤い旗を拒否する大学がどうしても必要です」
「しかしわたしは……」
「いや、千田さんは学校づくりの名手だと、大隈君から聞いています。わたしたちのこういう考え方に、賛同者はすくなくないはずです。国家将来の正しい指導層を養成する大学を、一日も早くつくらなければならない。協力してくれませんか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「日の丸を押し立てた大学……ですか」
「日の丸は日本の国旗ですよ」
千田の口調を皮肉と感じたのか、深間はさらにむきになって言った。
「わかりました。しかしいままでにわたしがつくった学校は二つです。学校づくりの名手などと言われると困ります」
「二つもつくられたのなら、実務面の知識があるはずですね」
「大学をつくった経験はありません」
「正しい指導層を養成する大学が、必要ないとおっしゃるんですか」
自分の信念を頭から押しつける深間の口調に、千田はむっとした。千田としては、いきなり切り出された話でもあり、しかも思想的な立場で、深間はそれを推進しようとしている。過去に二つの学校をつくったと言われても、千田は実務家という立場で設立を計画し、実現に漕ぎつけたものである。思想にたいする共鳴を迫られるのは迷惑だった。
もちろん戦時中は兵隊にとられ、天皇陛下のために戦った。しかし戦後は民主主義社会での自由を享受してきている。
「深間さん。そういう言い方じゃ、千田さんも返事のしようがない。そうではなくて、大学をつくるにはどうしたらいいか、そういう一般的なことを、千田さんに教えてもらう。まずそうすべきだと思うがどうだろうか」
「いいです。どうしたらいいか教えてくれませんか」
大隈の言葉に深間はあっさりうなずき、手酌でテーブルの酒を盃に満たした。千田も冷たくなった酒を舌先に含む。温厚な大隈の性格はよくわかっていたが、深間は直情的であった。性格に

余裕のない相手にたいしては、それだけ慎重でなければならない。
「千田さん。まずなにが必要なんだろうか」
大隈が重ねて聞いた。
千田は、気重い感情を払うように、顔を上げた。
「わかりました。それじゃどんな準備ができているのか、それをまず聞かせてください」
「準備？」
「そうです。大学の設置場所、どの程度の規模のものにするのか、学長にはどんな人物を考えているのか、そして建設資金のメドはついているのかどうかということです」
「場所は京都がいい」
「京都……」
「深間君は自宅が嵯峨野にあるんです」
「いやそんなことじゃない。国公立大学のなかで、最も教育が乱れているのが京大だ。学生だけではなく、教職員までが一緒になって赤い旗を押し立てている。だから京都に正統な大学をつくらなければならないんです。京都は日本人の心の故郷でもありますからね」
深間はむきな口調で、大隈の言葉を押し返した。苦笑気味に、大隈が千田の盃に酌をする。三人とも、テーブルに並べられた肴には、ほとんど手をつけていなかった。
「わたしがお聞きしたのは、大学新設用の土地が、どこに確保してあるかということです。学校づくりのスタートは、まず土地の確保にあります。土地が確保できれば、計画も半ばは達成されたと同じでしょう」
「まだとてもそんなところまでは……。何坪あったらいいだろうか」

「大学の規模によりますね」
「もちろん綜合大学さ。伊勢大学は文学部単一学部で、こんなのは基準にならないよ」
「三学部か四学部の綜合大学として、やはり二、三万坪はいるでしょう」
「二、三万坪……」
首を振りながら大隈がうめいた。
京都で、いまから二、三万坪の土地を確保すること。仮に土地があったとしても、坪当たりいくらするか見当がつかなかった。
「学長の予定は？」
千田はかまわず話を進めていった。
「いやまだ……」
「建設資金のメドはついていますか」
「しかしいくらかかるか見当がつかないからね」
「綜合大学だと、かなりな図書と、教校具、備品や図書館も必要になりますよ」
「……」
「設立準備にも、金はかかるでしょう」
「土地の買収費を別にして、どれくらいかかるでしょうね」
大学の規模を千田が確かめると、もちろん綜合大学をつくるんだと胸を張ってみせた深間だったが、千田の説明がすすむにつれ、意気込みが萎(しぼ)んでいく感じで、こんどは上眼遣いの力のない口調で聞いた。
「わかりません」

「概算で……」
「学部数や定員で、すべて変わってしまいます」
千田は深間にというよりも、大隈に向かって言った。準備ができていないというよりも、計画そのものがないに等しい。赤い旗を下ろすとか、日の丸を立てるという前に、しっかりした設立計画を練るべきであった。いずれにしても千田としては、奇妙な伊勢訪問となってしまった。

II

倉吉へ帰ってから、千田は妻の友子に、このとりとめのない大学新設計画に協力を求められた経緯は、なにも言わなかった。
「じゃ三日間も、大隈先生とお酒を飲んでいたんですか」
友子はあきれ顔で聞いた。
「内宮の参拝はしたよ」
千田も苦笑気味に言った。
三日間、酒を飲んでいたわけではなかったが、二日の予定を一日延ばし、大隈の案内で皇大神宮を参拝した以外は、ずっと宿にいて、深間かあるいは大隈、夜は三人揃って、具体的な大学設立計画の打ち合わせに、つきあわされてしまったのだった。
千田は、伊勢にいる間だけだと、自分に言い聞かせていた。
友子に言わなかったのは、そのためで、事実倉吉へ帰ってから、設立三年でようやく軌道にのりはじめた東伯学園の経営問題で、深間の押しつけがましい話に、かかわりあっている余裕はな

かった。
大学と言わず高校までを含めて、義務教育以上の学校経営は、政治家との駆け引きといってよく、それに失敗すると、たちまち行きつかえてしまうのだった。たとえば、施設を拡充するための、補助金一つにしても、政治家の匙加減次第で、有利に進めようとしたら、県知事や県議会、市長、市議会のボスやさらには地元選出の国会議員と、どういう接触をし、彼らをどう動かすかを考えなければならないのだった。東伯学園は、男女共学の高校として、一段の飛躍を目指す段階にさしかかっていた。
伊勢から帰ってからの千田は、来年度以降の計画を持って、毎日のように根廻しに動き廻っていた。
そんなとき、一度深間から手紙があった。
舞鶴にある短大が、そっくり買収できるかもしれないというものだった。
千田はその手紙を無視した。既設の短大を、敷地校舎ごと買収するとなったら、すべてを新しく建てる以上に金がかかってしまう。深間はそういう一番肝腎な点を見落としていた。
大隈武雄が、倉吉の千田の家を訪ねてきたのは、東伯学園も夏期休暇に入った七月の末である。
「この間は、千田さんに迷惑をかけてしまいました」
大隈は友子の顔を見るなり言った。
「大隈先生にご案内いただいたと、申しておりましたが……」
「それは一日だけですからね。雲を摑むような大学の新設計画に、どっぷりつきあわせてしまったんです」
「大学の新設計画？」

友子は、黙ったままの千田を上眼遣いに窺い、お茶を揃えて応接室を出ていった。
「奥さんには話してなかったんですね」
「ええ……」
「まずかった？」
「そんなことはありません」
千田は曖昧に首を振った。大隈には東伯学園の設立で世話になっていた。しかも深間の計画では当事者の一人だった。あの話には、今後つきあうつもりがなかったからと、露骨なことも言えない。だがさすがに大隈は、千田の当惑しているに違いない胸のうちを感じていた。
「深間君は直情的で頑固だからね。千田さんは当然協力してくれるものと、頭からきめてかかっている」
「……」
「例の自由文教人連盟、あの関西本部事務局長で、日教組反対に凝り固まっている人なんです。なにがなんでも、自分の手で大学をつくりたいというのも、彼の理想というか、執念の延長線みたいなものでね」
「大隈先生は？」
「深間君の手で、大学がつくれるとは思わないが、やれるところまでは協力してやりたいんです」
「難しいですよ」
「難しいということがほんとうにわかれば、それはそれで納得するでしょう。迷惑なのはわかっているが、もすこしつきあってもらえませんか」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com